

一九三〇年代における浙江省の棉花改良事業について

著者	弁納 オー
雑誌名	社會經濟史學
巻	62
号	5
ページ	602-629
発行年	1997-01-25
URL	http://hdl.handle.net/2297/9631

一九三〇年代における浙江省の棉花改良事業について

弁 納 才 一

一、はじめに

中国における近代化も、他のアジア諸国と同様に、多分に「土」を捨てて「洋」に替えるという面を含んでいた。周知の通りに、「洋」とは、外国、西洋、近代的なるものであり、一方、「土」とは、土着、在来、伝統的なるものである。以前、筆者は、中国農業の近代化における「土」と「洋」の相克の例として、一九二〇～三〇年代の浙江省において実施された蚕種改良事業について検討し、同省政府が土種（土着の在来蚕種）を改良種（品種改良された外来蚕種）に替えようとしたのに対して、多くの養蚕農民が土種を容易には捨てず、さらに一部の農民は「扶土滅洋」なるスローガンを叫んで改良種の導入に反対したこ

とを見た。⁽¹⁾ 実は、これとほぼ同様の農民の反応は、同じく一九

三〇年代の浙江省において実施された棉花改良事業の中にも見出すことができる。それは、「土花」から「洋花」へ、すなわち土棉（土着の在来棉）の栽培から改良棉（米棉・アメリカ棉、及び土棉の改良種である百万棉）の栽培への直接的な転換をめざすものだった。改良棉は、土棉より質的に優れ、収益性も高いことから、中国の多くの地域で急速に栽培されていったが、浙江省では、多くの棉作農民が改良棉の栽培の受容を拒否した。

ところで、一九三〇年代の浙江省の棉花改良事業⁽²⁾については、すでに先行研究で綿密な分析がなされ、これに関する事実⁽³⁾はほぼ言い尽くされたようにも見える。しかも、一九三二年の浙江省の棉花栽培面積は一六七万畝余りで全国の四・五一%を

占めるにすぎず、かつては寧波棉と呼ばれて中国の中で一定の重要な地位を占めていた浙江省の棉花も、一九三〇年代にはその地位は大きく失墜していた。このように見てくると、一九三〇年代の浙江省の棉花改良事業について検討する必要性は極めて少ないようにも思われる。

だが、以上のような事情にもかかわらず、本稿が一九三〇年代の浙江省の棉花改良事業を研究事例として敢えて取り上げるのは、同省ではほぼ同時期に実施された蚕種改良事業の場合と同様に、農民の一部が反対運動を展開した事情や背景を分析することが、中国農民にとって農業の近代化とは何だったのかを考える上で、極めて興味深く、かつ重要であると思われるからであり、また、この点の分析については、先行研究でもなお不十分だと感じるからである。

以上より、本稿の執筆の主要な目的は、一九三〇年代の浙江省における棉花改良事業の成果に対する評価を下すこと自体にあるのではなく、棉作農民の改良棉の栽培に対する受容ないしは拒否の態度を生み出すことになった原因について分析することにある。

二、棉花改良事業

(一) 意図と背景

一九三〇年代の中国において棉花改良事業が本格的に展開されるようになった事情とその意図は、それを実施した全国経済委員会によって、以下のように説明されている。すなわち、「民國二十年の原棉の輸入は四百餘萬擔、價格約二億元に達し、貿易開始以來最高の記録であつた。近年細布原料の需要が日々に増加したので、棉産の改善を計り、特に産額の増加、品質の改良の両者を並進させて、棉産自給の目的の達成を圖る事となつた」と。⁽⁴⁾

こうして、一九三五―三七年に、全国經濟委員会棉業統制委員會の下に棉産改進黨機關が江蘇、陝西、河北、河南、山西、湖北の各省で統々と設けられたが、⁽⁵⁾浙江省では、このような棉産改進黨機關は設置されず、棉業統制委員會の直接的な指導・支援を受けることなく、独力で棉花改良事業に取り組むことになった。また、棉業統制委員會の「優良品種推廣ノ方法ハ、従来棉作地ナラザル地域ニ対シ棉作ヲ提唱シテ棉田面積ヲ増加セシメ（江蘇省徐州、河南省汝南ノ一帯）、同時ニ在来棉ノ産額退化ヲ見ツツアル地域ニ対シテハ優良棉種ニ依ル品種更新ヲ実施スルノニ方面ニ置カレタリ」というように、⁽⁶⁾必ずしも土棉の栽培の盛んな地域に改良棉を導入して土棉を排除するものではなかつ

た。これに対して、浙江省では、古くから土棉が栽培されてきた地域に強引に改良棉を栽培させようとしたため、土棉と改良棉は正面からまともに衝突することになった。このような事態に至ったのは、同じ華中でも、湖北省が「到ル処土地棉作ニ適セル」状況だったのに対して、浙江省は「錢塘江口ニ於テノミ棉產地ノ存スル」状況だったからでもある。⁽⁷⁾

棉花改良の意図は、細糸用の原棉のための棉花の質的改良と原棉の自給化のための量的増加にあったが、一九三〇年代の浙江省の棉花改良事業もほぼ同様の意図があった。

例えば、譚熙鴻は、一九三三年一月の浙江省の棉産会議で、中国の棉業の改良事業は、「まず第一に、国内の原料を解決し、国外から購入しなくてもよいようにし、ついで、細糸を紡ぐための原料を求め、外国人にも供給できるまでにする」ことを目指すべきであり、とりまなおさず、「中国の原棉を国外に仰がなくともよいようにして、はじめて、棉紡績業の危機を減少させることができる」と説明している。⁽⁸⁾

また、一九三六年七月に浙江省農林改良場の場長に任じられた邵亮熙は、「棉業の推广を紡績工場と共同で進めれば、生産と消費の両方が平衡状態を保持でき、生産者と消費者は互惠均等の利益を得ることができる。そして、棉花を棉作農民から直

接紡績工場へ販売すれば、中間商人の搾取、価格抑制、秤をごまかすなどの悪弊を取り除くことができる。」と述べており、棉花改良事業が、棉花の質を高めると同時に中間商人を排除することによって、棉作農民と紡績工場の双方の利益を図ることを目指していると表明している。⁽⁹⁾

ところが、一九三七年に浙江省棉業改良場の場長となった蕭輔は、「棉業改良の最終的な目標は、品質の優良な原棉を供給し、現在の紡績業界の要求に適合することである」と明言している。⁽¹⁰⁾ 当時、その紡績業界の需要は漸次細糸に向かつており、細糸を紡ぐために「全国の紡織業界は改良棉を必要とし、輸入外国棉と代替することを求めていた」ので、浙江省政府は「数年来改良棉種の推進普及に尽力し、紡績業界の需要に応えようとした」のである。⁽¹²⁾ というのも、浙江省の土棉は、ただ八〜一四番手の低番手太糸を紡ぐことしかできず、⁽¹³⁾ 紡績業界が必要とする高番手細糸を紡ぐには適さなかったからである。⁽¹⁴⁾

それでは、浙江省が中国全体から見て必ずしも棉花生産の中心的な地域とは言えず、しかも、紡績工場側が最も好む米棉の栽培には必ずしも適さない地域だったにもかかわらず、なぜ棉花改良事業を強力に推し進める必要があったのだろうか。

当時、浙江省建設庁の庁長だった曾養甫は、「浙江省の棉産

地面積は北方の各省及び江蘇省よりも小さいが、紡績工場が最も多い上海に近く、運輸は非常に便利である。しかも、余姚県や紹興県などの棉花はもともと全国に広く名が知られており、科学的な方法で改良を加えれば必ず良好な成績を得るだろう。」と述べると同時に、「日本が東北三省を強奪した原因は多かつただろうが、日本は非棉産国で、紡績業が非常に発達しているので、広大な棉花生産地域の獲得を求めていたことも、その主因の一つであろう。」と分析していた⁽¹⁵⁾。また、浙江省の別の識者は、「我々中国人は日本人が武力を以て東北四省を占拠し侵略したことを知っているだけで、日本人が紡織を以て鋭い武器と爲して我國の市場を操縦していることを知らないが、その患いは武力侵略よりも更に深い」のであって、故に、「抗日は中国綿業を救済するところから着手すべきである」と述べている⁽¹⁶⁾。

いずれにしても、浙江省政府側は、中国綿業の実状に対する危機意識と、日本の中国侵略に対する非常に強い警戒心を抱いていた。そして、このような警戒心は、日本の「満州」占拠と、それに続く華北への進出の動きとも相俟って年を追うごとに強まっていったと考えられる。浙江省農林場の場長であった邵亮熙は、その当時の現状をまさに「千鈞一髮危急之秋」であると認識し、一九三六年末には以下のように述べるに至った。

すなわち、「最近、某国が華北において経済合作を進め、華北の棉花を当該国の棉業の生命線と見なして、棉産機関を設置し、棉花の栽培の普及を推進し、華北の原棉を支配しようとしている。これは警戒しなければならないことであり、浙江省の棉花改良の普及推進を急ぎ、国内の紗廠の原棉需要を充実させ、外国人によって食い物にされることを避けなければならない。」と。ここに述べられている「某国」とは、言うまでもなく、日本のことである。

一九三〇年代の浙江省には、杭州に三友実業社杭廠、蕭山に通惠公紗廠、寧波に和豊紗廠の計三つの紡績工場があり、浙江省で棉花改良が本格化する直前の一九三二年の各紡績工場が生産する綿糸は、通惠公紗廠が六〇一六番手、和豊紗廠が一〇一四番手だったが、三友実業社杭廠は二〇一四番手の細糸が中心だった⁽¹⁸⁾。さらに、その原棉の供給先は、生産する綿糸との関係から、通惠公紗廠は、通州棉花、陝西棉花、インド棉花も用いていたが、大部分は近くの紹興棉花を用い、和豊紗廠も、余姚棉花が七三、二〇〇担、陝西棉花が六、一六七担、インド棉花が一六、四六一担で、主に近くの余姚棉花を用いていたのに対して、三友実業社杭廠は、一部は一六二〇番手の綿糸を紡ぐことができた蕭山県瓜瀝、紹興県安昌、海寧県八堡、平湖県

全公亭などの土棉を用い、あるいは、微量ながら太糸を紡ぐ時に余姚棉花やインド棉花を用いたが、原棉の七五％は陝西棉花や米棉に仰いでいた。⁽¹⁹⁾ 一般的には八〜一四番手の低番手綿糸しか紡がない土棉は、主に二〇〜四二番手の細糸を生産する三友実業社杭廠の需要を充たすことはできなかった。このため、浙江省にある紡績工場としては、もし高番手細糸を生産しようとするれば、棉花を移入しないしは輸入せざるを得ない状況にあった。

そもそも、三友実業社は、浙江省慈谿県出身の陳万運ら三人が、一九一二年に上海の四川北路で蠟燭の芯を製造したことに始まる。第一次世界大戦中に急速に発展し、タオルの製造にも乗り出し、そのタオルは、それまで中国市場をほぼ独占していた日本製品を駆逐していった。やがて、一九二九年一月、杭州の通益公紗廠を買収したが、これが三友実業社杭廠（正式には三友実業社股份有限公司杭州通益公紡織廠、後に三友実業社股份有限公司杭州製造廠と改名）である。三友実業社は、一九三一年に全盛期を迎え、上海と杭州の工場の他に、上海郊外に一七のタオル工場、総発行所一ヶ所、三六の分発行所を擁するまでになった。ところで、一九三一年の九・一八事変以降、⁽²⁰⁾ 三友実業社の職員・労働者らが三友抗日義勇軍を組織しており、一九三二年一月一八日、上海の三友実業社総廠の裏通りで日本人

僧五人が暴徒に襲われるという事件が発生すると、⁽²¹⁾ これを三友実業社の労働者の仕業とみなした在華居留日本人が、二日後に徒党を組んで二度にわたって三友実業社を襲撃した。⁽²²⁾ このことが、同月末の日本軍の上海侵攻（一・二八事変、上海事変）へとつながっていったが、この日本軍の侵攻に抵抗する中国軍に対して、三友実業社はシャツとズボン下を贈るなどして支援した。⁽²³⁾ ただ、一・二八事変によって三友実業社も破壊され、操業を停止せざるをえなくなり、一九三二年六月には上海の三友実業社総廠が正式に閉鎖され、杭州に移った陳万運が、品質優良の米棉を利用して、タオル、布、衣料品、シーツなどを生産するようになり、⁽²⁴⁾ 上海総廠の熟練労働者八〇人を杭州へ移転させた。⁽²⁵⁾ こうして、三友実業社の生産の重心は杭州の三友実業社杭廠へ移っていった。

三友実業社杭廠は、上記のような事情、すなわち、品質の優良な米棉を必要とするようになったことから、浙江省政府の推進する棉花改良事業に強い関心を持ち、しかも、それと密接な関係を持っていたようである。例えば、浙江省建設庁は、一九三二年一月七日に綿業の専門家及び紡績工場側を召集して棉産会議を開き、綿業の専門家及び紡績工場側の銀行家を招いて浙江省棉業改進委員会を組織することを決議し、上海の著名な綿

業資本家の穆藕初などを委員とし、⁽²⁶⁾また、一九三三年一月七日にも棉産會議を開き、棉花の品質を改良し、棉花生産量を増加させることが決議されたが、この會議には、実業部、上海紗廠連合會、棉產地各県政府の代表などと並んで、三友実業社の代表も参加していた。しかも、三友実業社杭廠に近接する杭県及び蕭山県に棉業改良実施区を設置し、改良棉花を栽培させることが決定された。⁽²⁷⁾一方、一九三三年、浙江省建設庁は、杭県と蕭山の棉業改良実施区で百万棉の栽培を奨励するために三友実業社杭廠に対して棉作農民にタオルを配らせ、棉花の買付けもさせているが、⁽²⁸⁾その見返りと言ふべきだろうか、それらの棉業改良実施区で生産された改良棉皮棉一、三〇〇担余りの大部分が三友実業社杭廠に売却されている。⁽²⁹⁾さらに、一九三五年に各棉業改良実施区で挙行された棉産展覽會の經費三、〇〇〇元のうち、一、〇〇〇元は同展覽會の棉織品出售処に綿織物製品を出品した紡績企業に出資させていた。こうして、一九三六年には、杭県と蕭山県の棉業改良実施区で収集された四・四万担余りの棉花の大部分は、三友実業社杭廠と和豊紗廠に売却された。⁽³¹⁾

以上、中国の中では必ずしも中心的な棉花生産地ではなかった浙江省でも、棉花の改良が急がれたのは、浙江省の棉花の大部分消費地であった上海に近いということ以外に、日本の華北進出

に伴う原棉供給地の喪失という危機的状況に対する保障的措置として、何よりもまず浙江省にある紡績工場が、近場で生産される棉花を確保しようとしていたからだ。とりわけ、高番手細糸のための原棉を必要とし、実際に原棉の七五％を陝西棉花や米棉に仰いでいた三友実業社杭廠こそが、棉花改良に対しても熱心にならざるを得なかった。

(二) 実施状況

一九一九年冬、余姚県龍泉郷馬堰頭に六〇畝余りの浙江省立棉種試験場が設立され、これが一九二八年には省立棉業改良場と改名され、馬堰頭に総場が置かれ、慈谿と平湖の両県に分場が置かれた。さらに一九三〇年には、杭県、上虞、蕭山の三県に育種場が設立され、一九三二年九月には、総場が杭州の七堡に移されて省農業改良総場棉場と改組された。⁽³²⁾

こうして、一九三三年には、杭県と蕭山県に棉業改良実施区が設立され、棉花改良事業が本格的に展開された。まず、杭県では、実施区が同県の喬司に設けられ、実施区内の棉花栽培農家の戸数、姓名、年齢、棉花栽培面積を登記させたところ、一八三戸の棉作農家があり、棉花栽培面積は一、八〇〇畝余りだったことがわかった。次いで、棉作農家が百万棉の栽培に対して疑

いを持っていたので、棉産品展覧会を開き、実物をもって百万棉の品質の優良さを証明しようとした。さらに、実施区内の農民の大部分は、貧困に苦しみ、毎年端境期になると、棉花を安い価格で売ることを条件に番司の商人から米を掛けて買って暮らしていたので、これを救済するために、合作社を組織した。この合作社を通じて、中国農工銀行から三、五〇〇元を借り、一七四人の合作社の社員に永代小作権や収穫予定の棉花を担保にして棉花栽培面積一畝につき二元を貸すとともに、棉花栽培のための肥料として油粕三五〇担を購入して社員に貸した。同じく、蕭山県でも、宣伝のために、棉産展覧会や棉農談話会が開かれ、登記の後に百万棉種が配布された。また、棉花栽培法を指導するとともに、肥料として三万斤余りの油粕が貸し出された。さらに、実施区内の棉作農民が棉花商人から搾取されるのを避けるために、農工銀行から資金を借り、事務所内に収花処を設けて、改良棉を土棉よりも二〇%高く収買した⁽³³⁾。

一九三四年になると、実施区内の改良棉花の栽培面積が拡大されていった。すなわち、杭県の一九三三年の棉業改良実施区の区域は、学稼草堂及び農業会社の坤園と兌園で、改良棉の栽培面積は一、八〇〇余畝（一八三戸）だったが、一九三四年には、宏海草堂の一、〇一三畝（六一戸）、丁稼公司の七九畝（六

戸）、感化習芸所の一、五八一畝（九二戸）、裏合興公司の一、六三〇畝（二〇九戸）を加えて、改良棉花の栽培面積は六、五五五畝（四七九戸）にまで拡大した⁽³⁴⁾。また、蕭山県でも、棉業改良実施区は一九三三年の約一、〇〇〇畝から一九三四年には約四、〇〇〇畝へと拡大した（表一を参照）。さらに、同年は、杭県や蕭山県以外に、余姚県にも棉業改良実施区が設置された。余姚県では、実施区内の棉作農民を統制し、一律に百万棉種の栽培に改めさせ、土種を根絶し、将来は百万棉の栽培を実施区から同県全域に拡大することを目指して、馬堰・石堰・泰堰の三つの相互に隣接する郷が実施区に選定され、郷長と各郷の隣閭長を通して農民にも説明された。こうして、同年三月には成立大会が開かれ、省棉場場長の馮肇傳、余姚県建設科長、慈谿合作棉場主任の陳鍾瑾、新浦沿育種区主任の楊度春、馬堰など三郷の郷長と各郷の棉作農民など、合計五〇〇〜六〇〇人が参加した。棉花改良事業は、まず登記から始まった。閭長が各村を調査し、棉作農民の姓名、棉花栽培面積、栽培地点、稲作面積などを戸別に登記し、百万棉種受取証が配布され、棉花栽培面積一畝につき七斤の棉種を配布することにした。こうして、八七九戸の農家に各戸平均二二斤余りの百万棉種が配布された。その後、播種を始めとする棉花栽培に関する技術上の指導とと

もに、肥料の手当も行なつた。すなわち、実施区の棉作農民の中には肥料を購入できない者が非常に多かつたので、馬堰郷合作社と協力して、大豆しめ粕の貸付けを行なうことになり、当該合作社が直接上海に出向いて大豆しめ粕一、〇〇〇張（一張＝五一・五斤）を購入し、低利で買付け、さらに、余姚農民銀行にも、同様の要請をしたところ、当該銀行は上海に出向いて大豆しめ粕二、〇〇〇張を購入して、貸付けを行なつた。⁽³⁵⁾

一九三五年には、棉作農民に対する指導工作が継続されるとともに、実施区の面積がさらに拡大された。まず、杭県では、実施区の植棉面積が一五、二六一畝に拡大され、棉種の配布、播種、間引き、中耕除草、施肥、摘心、病虫害駆除、收穫に対する指導の他に、合作社の組織化と運搬・販売の経営に対する指導も行なわれ、宣伝のために農民夜校が開かれた。⁽³⁶⁾ また、蕭山県では、同県東北部の盈田・盛田・寧田と腰帶、老糧及び頭蓬鎮付近の一部が実施区の範圍とされ、全区の棉作農民は三、〇八五戸、その植棉面積は二四、二四八畝となった。そして、棉作農民に対する調査・登記、百万棉種の貸与ないし土棉種との交換、播種、間引き、中耕除草、移植、施肥、病虫害駆除、排水、收穫、販売、留種などに対する指導などが行なわれた。このうち、施肥については、盈田棉業生産合作社と盛寧田棉業

生産合作社を組織し、銀行からの借款で油粕を購入して、棉作農民に貸付けた。この合作社には棉作農民二、三七〇戸余のうち約四分の一が入社していた。他に、農民教育の推進のため、計三一ヶ所で農事講習会が実施され、実施区の棉作農家全体の三分の一以上にあたる一、二〇〇人余りが参加し、蕭山県教科の補助を受けて農民夜校も開かれた。⁽³⁷⁾ さらに、余姚県では、実施区の植棉面積が二八の郷鎮の三・六万畝に拡大され、棉花畑の登記、棉種の交換と配布に続いて、播種、間引き、中耕除草、施肥、排水などに対する指導が行なわれた。⁽³⁸⁾

一方、一九三五―三六年には、定海県、鎮海県、海塩県にも実施区が設立され、また、慈谿県、上虞県、鄞県には推広区が設立され、百万棉や訓化米棉の栽培の普及が推進された（地図を参照）。この間、当該棉場の直属先は、浙江省農業推広委員会（一九三五年一月）、浙江省建設庁（一九三六年一月）、浙江省農林改良場（一九三六年七月）と転々とし、さらに、一九三七年二月には浙江省棉業改良場と改名されて浙江省建設庁に直属した。やがて、日本軍の侵攻によって杭州が陥落すると、棉業改良場は浙江省東部へと移り、一九三八年には農業改進所に吸収合併された。⁽³⁹⁾

ところで、改良棉として導入された米棉と百万棉は、紡績工

場が必要とする高番手細糸用の原棉としては土棉より優れていた。杭県の一九三〇〜三二年の三年間の土棉の一畝当たりの実棉生産量は年平均四〇斤だったのに対して、一九三一〜三二年の二年間の百万棉のそれは六一斤だった。⁽⁴⁰⁾また、棉業改良実施区で栽培された改良棉の一畝当たりの平均生産量は、一九三三年には九〇余斤で土棉より一〇余斤多く、一九三四年には一一〇〜一三〇斤で土棉より二〇余斤多く、さらに一九三六年には改良棉の一畝当たりの平均生産量は一二〇〜二〇〇斤となった。⁽⁴¹⁾その上、販売価格も、百万棉は土棉の姚花に比べて一担につき六元以上高く、⁽⁴²⁾一般に改良棉の販売価格は土棉より一〜二割高かった。⁽⁴³⁾しかも、一九三五年に上海に浙棉推銷処が設立されると、申新、民豊、三友、大綸などの紡績工場が喜んで浙江省の改良棉を買い付けて、蕭山県の百万棉を「標花第一級丁等」、また余姚県の百万棉を「標花第二級甲等」とそれぞれ規定するなど、⁽⁴⁴⁾質的に上海の紡績工場の要求にも違わないものだった。

もちろん、同じ改良棉と言っても、米棉と百万棉との間には質的な違いがあった。例えば、百万棉が二八番手の綿糸までしか紡げなかったのに対して、米棉は四〇番手の細糸を紡ぐことができた。⁽⁴⁵⁾また、一九三四年に百万棉を使用した三友実業社は、一六番手の綿糸の強度は、米棉が八六ポンドであったのに

対して、百万棉は六七〜七二ポンドにしかすぎず、百万棉は改善の必要があると報告していた。⁽⁴⁶⁾だが、いづれにしても、省政府側は、收穫量及び販売価格で改良棉が土棉より明らかに優れており、その上、棉作農民にとっても改良棉の栽培は土棉のそれよりも収益性が高いと確信していた。

それでは、浙江省政府は、なぜこのように質的に優れた米棉のみを全面的に導入しなかったのだろうか。当初、省棉業改良場では米棉を普及させようとした。だが、浙江省は雨量が多く、米棉は成熟が遅いため、開花時期になって花の多くは結実せず、生産量も少なかった。これに対して、百万棉は、綿の実が大きくて多かった上に、土棉の改良種であったために收穫期が早く、浙江省のように毎年秋になると台風の荒れ狂う地域には頗る適していた。⁽⁴⁷⁾しかも、百万棉が相対的に早熟だったことは、紡績工場にとって棉花の端境期に需要にちょうど適合していた。⁽⁴⁸⁾ちなみに、生育期は、米棉の一種である倍字棉が一一〇〜一四〇日だったのに対して、百万棉はわずか九三日で、在来棉の南陽種の一三三日よりも短かった。⁽⁴⁹⁾こうして、河川の沿岸地域では百万棉の普及を推進し、沿海地域では塩分に対する抵抗力を持つ米棉の普及を推進することになった。⁽⁵⁰⁾

以上、一九三〇年代の浙江省の棉花改良事業は、棉花の質を

1930年代における浙江省の棉花改良事業について

表1 浙江省各県棉花栽培面積（単位：万畝）

県名	種類	年度				
		1933	1934	1935	1936	1937
余姚	土棉	73.9	75.0	74.9	75.6	72.7
	百万棉		0.3	2.3	1.1	
	米棉			0.6	0.4	
蕭山	土棉	26.0	26.1	26.0	26.2	21.6
	百万棉	0.1	0.4	2.4	1.5	
紹興	土棉	10.6	10.7	10.6	10.6	7.4
慈谿	土棉	15.6	15.6	13.6	12.8	12.2
	米棉			2.0	0.7	0.1
上虞	土棉	9.8	8.3	8.3	8.2	8.8
	米棉				0.1	
平湖	土棉	9.8	10.0	15.0	14.0	12.8
鎮海	土棉	7.0	7.0	5.3	3.8	4.7
	米棉		1.0	2.8	3.3	3.4
海寧	土棉	0.6	0.6	0.6	0.6	0.7
杭 県	土棉	6.7	7.1	9.0	9.0	9.2
	百万棉	0.1	0.6	1.5	1.2	
海 塩	土棉	0.2	0.3			
	米棉			0.2	0.2	0.2
鄞 県	土棉	1.0	0.5	0.7	0.9	0.7
	米棉				0.2	0.3
定 海	土棉	1.5	0.5	0.5	0.8	1.5
	米棉		0.2		0.7	0.3
象山	土棉			0.8	0.8	0.4
寧海	土棉			0.9	0.8	1.1
黄 巖	土棉			0.6	0.5	0.5
臨海	土棉			1.5	0.1	1.4
玉環	土棉			0.5	0.4	0.5
瑞安	土棉			0.1	0.1	0.2
樂清	土棉			0.1		
温 嶺	土棉			0.4	0.1	0.4
新 登	土棉			0.1		
合 計	土棉					157
	百万棉	0.3	1.4	6.3	3.8	
	米棉		1.3	5.9	5.8	4.9
	総 計	163	163	175	171	162

出典）中華棉業統計会『民国二十三年 中国棉産統計』158～161ページ、『民国二十五年中国棉産統計 附二十六年中国棉産統計』51～52ページ、96ページ。ただし、百万棉については、蕭輔「十年來之浙江棉業改良与推广」（『浙江建設月刊』第10巻第11期、1937年5月）87～89ページによる。
 （注）土棉の数値には、百万棉の数値が含まれている。

紡績工場が必要とするものに改め、また、棉花の流通に携わる商人を排除しようという意図を持っていた。改良棉は土棉に比べて単位面積当たりの生産量が多く、販売価格も高かったの
 で、土棉に代えて改良棉を栽培することは、農民にとって利益
 となると考えられた。また、棉花商人の排除は、彼らの搾取に

苦しむ棉作農民の救済にもつながると考えられていた。しかし、棉花の品質向上にしろ、あるいは棉花商人の排除にしろ、紡績工場の利益こそが最も考慮されていた。すなわち、土棉は、紡績工場が求めている高番手細糸のための原棉としては適
 さなかったため、農民に土棉に代えて改良棉を栽培するように

表2 浙江省各県棉花生産量（単位：万担）

県名	年度 種類	1933	1934	1935	1936	1937
余姚	土 棉	16.8	21.6	25.0	47.6	25.5
	百万棉		0.5	2.7	2.3	
	米 棉			0.2	0.2	
蕭山	土 棉	10.0	8.2	5.0	10.0	3.7
	百万棉	0.1	0.4	1.8	1.8	
紹興	土 棉	2.6	2.2	1.9	3.7	1.2
慈谿	土 棉	2.7	4.3	4.4	6.1	2.3
	米 棉			0.7	0.3	
上虞	土 棉	2.0	1.7	1.5	3.4	3.1
平湖	土 棉	1.3	3.3	1.6	4.2	4.7
鎮海	土 棉	0.8	1.9	1.7	1.8	1.7
	米 棉		0.4	1.0	1.6	1.2
海寧	土 棉	0.1	0.1		0.2	
杭 県	土 棉	2.0	1.7	1.3	3.3	3.2
	百万棉	0.1	0.4	0.6	1.2	
海塩	土 棉				0.1	
	米 棉					
鄞 県	土 棉	0.1	0.1	0.2	0.4	0.2
	米 棉				0.1	0.2
定海	土 棉	0.1	0.1	0.2	0.2	0.5
	米 棉				0.3	0.1
象山	土 棉			0.1	0.2	
寧海	土 棉			0.1	0.2	0.2
黄巖	土 棉			0.1	0.1	
臨海	土 棉			0.2		0.1
玉环	土 棉					0.1
温嶺	土 棉			0.1		0.1
合 計	土 棉				82.3	47.7
	百万棉	0.2	1.4	5.1	5.4	
	米 棉		0.5	2.0	2.8	1.7
	総 計	39.1	46.2	46.1	85.2	49.5

出典）表1に同じ。

求めたのである。

(三) 成果

表1によって、改良棉の栽培の普及の状況を見てみると、省全体の改良棉の栽培面積は、一九三六年は前年に比べて二万畝

余り減少したものの、一九三五年には一二万畝余りにまで拡大した。また、表2を見ると、収穫量は一九三六年まで一貫して増加しており、一九三六年の改良棉の生産量は八万担余りとなった。もっとも、同年の棉花の栽培面積は約一七一万畝で、その生産量は八五万担余りであったから、改良棉は、栽培面積で

は全体の約七%余りにすぎず、また、生産量でも全体の約九%余りにしかすぎなかった。このように、浙江省全体の棉花生産から見れば、抗日戦争以前までの同省の改良棉の栽培面積及び生産量はかなり少なく、棉花を栽培する農民の多くは、依然として土棉の栽培に固執し、改良棉の栽培をなかなか受け入れなかったということになる。

ただし、再び表1を見ると、余姚、杭県、蕭山、鎮海、慈谿などの県では、改良棉の栽培面積が相対的に広いが、一九三五年から一九三六年にかけて、蕭山、余姚、慈谿などの県では改良棉の栽培の普及の後退が激しかったのに対して、鎮海や定海などの県ではむしろ改良棉の栽培の普及が進んでいたことがわかる。ちなみに、一九三七年の米棉のみの栽培面積を見ると、鎮海県では約三・四万畝となっており、前年よりも一層拡大しているのに対して、余姚県では五〇〇畝、慈谿県では一、七五〇畝となっており、前年よりも一層激減している。⁽⁵¹⁾ また、各県の改良棉の栽培面積が同県の棉花栽培面積全体に占める比率は、一九三五年には、海塩、鎮海、杭県などの県で高く、逆に、余姚、上虞、平湖などの県で低くなっている。さらに、一九三六年の改良棉の栽培の普及状況を見ると、定海、海塩、鎮海、郵県、杭県などの県では改良棉がかなり普及したのに対し

て、余姚、上虞、平湖、蕭山、慈谿などの県では改良棉の普及がそれほど進まなかったと言える。

浙江省の中でも鎮海県は改良棉の栽培が比較的受け入れられた地域だが、同県の中でも各々の地区によってさらに差が見られた。同県の一九三五年の棉花栽培面積七二、〇〇〇畝余りのうち、改良棉の栽培面積は二七、一二四畝で、その内訳は、西部の龍湓分区（龍山・湓浦）が七、四九四畝、中部の南泓分区（蠶浦・石塘頭）が九、六〇〇畝、東部の梅山分区（梅山島）が一〇、〇三〇畝だった。⁽⁵²⁾ そもそも、前年の一九三四年には、梅山分区の棉花栽培面積は約一六、〇〇〇畝で、また、南泓分区の米棉の栽培面積は一、〇〇〇畝であって、その収穫量は土棉の四倍だったというから、⁽⁵³⁾ 南泓分区と梅山分区では改良棉の栽培の受け入れが非常に進んだことがわかる。ところで、一九三五年に棉種配布のための登記を開始したところ、南泓分区は最も順調に進行したが、龍湓分区の棉作農民は気性が激しく抵抗が激烈だった。また、南泓分区の棉作農民の多くは、余姚県からの居留民で、棉花栽培を専業として生計を維持しており、栽培は比較的精密であったのに対して、龍湓分区の棉作農民は、棉花を栽培する以外に水稻を栽培しており、農繁期には棉花畑を顧みる暇がないような状態になると説明されている。⁽⁵⁴⁾ だ

が、改良棉の收穫の成績は、土棉に比べて一畝あたり三〇余斤の増収で、南泓分区が最も良く、龍湫分区がこれに次ぎ、梅山分区が最も良くなかつた。⁽⁵⁵⁾このように、各地区で生じた米棉の收穫の差と米棉の栽培に対する棉作農民の反発とは、必ずしも比例しないし一致してはいない。むしろ、棉花の栽培が農家経営全体の中で占める位置に差があつたと予想される。

杭県の一九三三年の棉業改良実施区の改良棉の一畝あたりの生産量は、個人的には一六〇斤余りのところもあつたが、各地域の平均をとつてみると、兌園の八二斤余り、坤園の七五斤余り、学嫁園（学嫁草堂）の六五斤余り、合興園（裏合興公司）の三八斤余り、感化園（感化習芸所）の三四斤余り、宏海園（宏海草堂）の三四斤、丁嫁園（丁嫁公司）の二七斤と各地域でかなりの差があり、一般的に新たに棉業改良区に加えられた地域の単位面積当たりの棉花生産量は相対的に低かつた。⁽⁵⁶⁾ただ、杭県では、一九三四年に合興公司及感化習芸所で改良棉に対する反対運動があつたにもかかわらず、翌年の一九三五年には改良棉の栽培面積は拡大した。確かに、一九三六年には一九三五年よりも改良棉の栽培面積はやや減少したが、余姚県などのそれと比較すれば、その減少幅は小さかつた。

三、農村側の反応

(一) 反対の動き

改良棉を栽培するように奨励された浙江省の棉作農民の反応は、省政府側の予期したものとは大きく異なつてゐた。浙江省の主要な棉花生産地では、ほぼ例外なく改良棉の栽培の導入に反対する動きが見られた。

例えば、杭県では、一九三四年春に棉花改良事業の開始に先立つて挙行された棉農大会で合興公司の經理の李叔棠が百万棉の導入を公然と非難する演説を行なつたり、あるいは、棉業改良実施区の棉花畑の登記期間中に、合興公司及感化習芸所の棉農二〇〇人余りが、事務所に押し寄せて百万棉の栽培を強制しないように要求して、棉種配布の際には、同実施区で銅鑼を鳴らして人を集めて、棉作農民に百万棉を栽培しないように勧めたりした。⁽⁵⁷⁾

さらに、一九三五年にも、杭県で播種の際に再び騒動が起きたのはじめ、蕭山県でも、棉種配布の際に多数の棉作農民が棉種を受け取りに來ないことによつて消極的抵抗を行なつた⁽⁵⁸⁾。蕭山県寧甯の農民を代表して兪連煥なる人物が省政府に対して百万棉の栽培を免除してもらつて自由に土棉を栽培できろ

ように請求するなどの動きがあった。⁽⁶⁵⁾ また、鎮海県の龍山・滄浦一帯でも、棉種配布のための登記を開始したところ、棉作農民が激しく抵抗したと報告されている。⁽⁶¹⁾

最も頻繁かつ激しい騒動が起こったのは余姚県で、省政府がこれに対処するために警察隊を派遣するほどの事態にまで至った。⁽⁶²⁾ 特に余姚県新浦沿では、省建設科長が農村へ出向き棉作農民に勧告・指導したところ、突然、潘堯章なる農民が数千人の群衆を集めて建設科長を包囲した上に、余姚県棉業改良実施区の事務所に放火してこれを破壊してしまった。⁽⁶³⁾ このような棉作農民の改良棉花栽培の導入への反対の動きに対して、浙江省建設庁は、同庁秘書兼棉業管理処主任の汪英賓を上海に派遣して、上海の著名な綿業資本家の虞洽卿に農民への説得工作をしてもらっている。⁽⁶⁴⁾

しかし、このような余姚県新浦沿における暴動のうわさは、隣接する慈谿県にも伝わった。しかも、当地の米商がデマを流して、もし米棉を栽培すれば、米を掛け売ししないと言って、棉作農民を脅していた。こうして、慈谿県でも余姚県と同様の暴動が発生するのではないかという危惧が生じたため、軍警を派遣して警備するなどの措置がとられ、慈谿県も一時はかなり緊迫した状況になった。⁽⁶⁵⁾

さて、棉花改良事業では、改良棉の栽培の導入とともに、浙江省政府が意図していた中間商人の排除に対しても、農村側の反発が見られた。

鎮海県のうち、まず、龍湫分区では、米棉の収買を解恒泰花号のみに許可していたが、米棉の収買による利益が多いことを知った同地区内の花行は、解恒泰花号が市場を独占して棉花価格を低く押さえていると宣伝し、解恒泰花号に賠償金を要求し、もし期限内に要求が受け入れられなければ、家を焼き討ちにすると脅迫した。そこで、鎮海県政府は、各郷鎮長を召集して範市鎮で会議を開き、解恒泰花号に三六九元の賠償金を支払わせて農民に分配すること、及び、同昌花行にも米棉の収買を許可することを決めてどうにか決着した。また、南泓分区では、合作社や花行が自由に米棉を収買することになっていたが、しばしばめめ事が起こったため、二つの合作社と二つの花行に収買を許可した。さらに、梅山分区では、本来は和豊紗廠が出張所を設けて米棉を収買することになっていたが、新たに組織された合作社も米棉の一部を収買することになった。⁽⁶⁶⁾ 結局、南泓分区では、岑茂泰、岑順記の二つの花行と後海塘、沙地の二つの合作社が、梅山分区では、和豊紗廠と裏忞合作社が、米棉の収買を許可された。⁽⁶⁷⁾

慈谿県でも、当初は鎮海県と同様に解恒泰花号のみに米棉の収買を許可していたが、解恒泰花号による収買の開始が遅れて、農民は待ちきれなくなり、しかも米棉の収買は三倍の儲けがあると分かるや、他の花行が群れをなして続々とやって来て密かに米棉を収買していった。⁽⁶⁸⁾これらの花行が、市場価格を独占・支配し、農民に甚大な損失を与えたといふことで、密かな収買による低値買い叩きを防止するため、解恒泰花号以外に、東山頭恒記、協記、東新、觀海衛姜益大、姜天華など、六つの花行にも米棉の収買を許可し、公開で競争させて収買させた。⁽⁷⁰⁾

余姚県では、百万棉の栽培を導入した地域と米棉の栽培を導入した地域で、それぞれ状況が異なっていた。百万棉の栽培を導入した地域では、各郷鎮に組織された棉花運銷合作社を統合して聯合会とし、この聯合会が百万棉銷辦事処を設置して、百万棉の収買を行なった。だが、米棉の栽培を導入した地域では、交通の便が良くなり、合作社を組織することができなかった。恒豊花号に米棉の収買を許可した。⁽⁷¹⁾これに對して、慈谿県や鎮海県の商人が越境して密かに収買を行なったので、余姚県政府は、取締りを強化し、恒豊花号による独占的な米棉の収買を維持した。⁽⁷²⁾

杭県棉業改良実施区では、合作社と協力して聯合収花処を設立し、百万棉の収買を行ない、農民が花行に百万棉を売ることを禁じたが、密売する者が多かったため、県内の棉花移出地点数カ所に検査処を設けて監視し、⁽⁷³⁾各花行へも検査員が派遣された。⁽⁷⁴⁾

以上、合作社を組織することができなかった場合には、従来の棉花仲買商人の花号に對して独占的に改良棉を収買することを許可し、花号よりもやや小規模な在地の棉花仲買商人である花行を排除しようとした。

省政府としては、以上のような棉花改良に絡んで発生した農村側の反発の動きに對応して、改良棉の収買棉花を、花号だけでなく在地棉花仲買商人の花行にも許可するという譲歩を示すことは可能だった。確かに、米棉の収買に中間商人を多く介在させることは、紡績工場からすれば、原棉コストをそれだけ引き上げてしまうことになるが、それでも紡績工場側が必要とする原棉は確保される。しかし、棉花改良事業の中心的な意図が紡績工場に改良棉を手当てすることにあったから、改良棉の栽培の導入に對する棉作農民の反對の動きに對しては、ほとんど譲歩の余地がなかった。

(二) 反対の動きに対する見方

棉作農民の改良棉の栽培に対する抵抗の理由については、當時から様々な見方があった。例えば、一九三五年における余姚県の動向については、「時偶々世界ノ棉價下落セルト、指導方針拙劣デアツタ為メ、改良種ハ品質在來種ニ比シ遙カニ優秀ナルニ拘ラズ棉民ヨリ買付價格ハ在來種ト差異ヲ認ナカツタモノノ様デアル」棉民が収入ハ前年ヨリ却ツテ減少シタ。特ニ新浦沿附近ニ於テハ其ノ年ノ天候ガ折惡シク米棉種ニ不適當デアツタ為メ、收穫ハ豫想ノ如ク増加セズ、為メニ棉農ノ激怒スル所トナ⁽⁷⁶⁾ったという分析がある一方、改良棉の栽培の導入に否定的な立場からの意見としては、棉作農民が棉花改良に反対するのは、改良棉の生産量が多くないからだという見方もあった。さらに、「土棉は決して劣悪ではないのに、どうして外国棉の栽培を強制するのか。」といった疑問や、改良棉は「国外の土地・氣候に適したとしても、必ずしも我が国には適さないし、また北方に適したとしても、必ずしも南方には適さない。」とか、あるいは「百万棉は蕭山県には適するかも知れないが、杭甬甌司鎮には適さない。」などといった批判も相次いだ。⁽⁷⁷⁾

だが、以上に述べてきたような批判は、省政府側からすれば、全く根拠のないものと思われたはずである。先に見たよう

に、米棉や百万棉などの改良棉が土棉に対して、單位面積当たりの生産性はもちろんのこと、その収益性も優位性を示していたことは、自明のことだという認識を持っていたからである。

そこで、一九三五年に浙江省棉業管理処の副主任であった馮肇傳は、棉農が改良棉の導入に反対する事業について、改良棉の栽培を推進する立場から、以下のように分析している。

まず、第一に、農民は怠惰で保守的でかつ知識が浅く、貧困の故に日常の生活費や生産費を土豪劣紳や商店に仰ぎ、債務関係により彼らの言いなりになっている。その上、改良棉は政府が統制しているので、土棉と違って水や雑物を混入することが、できず、生産量や租税額をごまかすのも難しい。また、第二に、農民が改良棉を栽培すれば、それまで棉作農民に対して種子・米穀・肥料を貸付け、秋に棉花を集めていた商店は搾取の機会を失うことになる。しかも、土豪劣紳は本来波風を立てるのが好きで、中間に立って私服を肥やすもので、農民の改良棉に反対する心理を利用して扇動している。その他に、苦境に立たされた牧師、信者、失業者、無頼の政客などが悪人を助けて悪事をなしている。⁽⁷⁸⁾

右記の馮肇傳に限らず、省政府側は、一般的に農民が無知で保守的であるため、棉花改良の意義がわからず、土豪劣紳や棉

花商人に唆されていると捉え、改良棉の栽培の受け入れを拒否する棉作農民を「頑愚之輩」と見なし、一方、逆に省政府の指導に従って積極的に改良棉の栽培を受け入れた棉作農民を「純良之農民」として区別していた。⁽⁸⁰⁾

ところが、改良棉の栽培の受け入れに反対する動きが見られた慈谿県でさえも、改良棉の栽培を積極的に受け入れようとする農民もいた。例えば、慈谿県洋山郷では、米棉が生産量が多く価格が高いのを知って、郷長自らが棉業改良実施区にやって来て米棉の栽培を要求して許可された。⁽⁸¹⁾ また、鎮海県では、当初、多数の棉作農民は米棉の栽培に対して疑いを持っていたが、米棉の収穫が良かったので納得し、二〇余人の富裕な棉作農民が例年土棉を栽培したのに比べて三〇〇余元の増収となったとして謝意を表した。⁽⁸²⁾

このように、改良棉の栽培の受け入れに対する農民の反応は一樣ではなかったのであり、単に改良棉と土棉の優劣のみを比較する方法や、前記の馮肇傳のような分析だけでは、ある一定の地域内に改良棉の栽培を積極的に受容する農民と土棉の栽培に固執する農民が並存していた理由を説明することはできない。そこで、以下では、各県の棉花の生産状況や改良棉の栽培面積などから、その受け入れの実態を踏まえ、各地域の在来綿業の

再生産構造の中における棉花栽培の位置を探ることにしたい。

四、在来綿業の再生産構造

(一) 棉花の生産

浙江省の中の定海、鎮海、蕞県、慈谿、余姚、上虞、紹興、蕭山、杭県、海寧、海塩、平湖、富陽、新登などの沿海の諸県は、砂質地の故に棉花の栽培には適し、同省の主要な棉花の生産地となっており、寧波はその主要な集散市場となっていた。また、棉花の生産量では、曹娥江以西の余姚、慈谿、上虞などの県で生産される姚紹花が最も多く、曹娥江以西の紹興、蕭山などの県で生産される紹花がこれに次いでいた。かつて、姚花と紹花は、繊維は粗短だったが、生産量が豊富で、色沢が純白で、衣服の中入れ綿や蒲団綿に頗る適し、また、低番手太糸の原料になり得るために、中国の綿業市場で相当の地位と名声を得ていた。⁽⁸³⁾ しかも、その収穫期が「普通上海棉ニ比シ二週間位早く端境期ニ於テハ重用セラ」れていた。⁽⁸⁴⁾

さらに、浙江省の県別の棉花生産の状況を見ると、二〇世紀初め頃には、蕭山県の棉花栽培面積が約五〇万畝で、その生産量は同省の中で最も多かったと言われている。⁽⁸⁵⁾ だが、表1―表3を見ると、一九二六年以降は、余姚県が棉花の栽培面積最大

1930年代における浙江省の棉花改良事業について

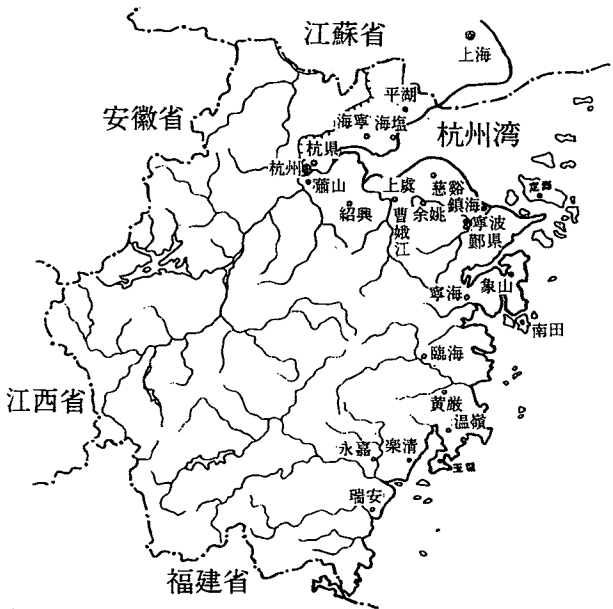
表3 浙江省各県棉花栽培面積及び生産量（単位：万畝／万担）

県名	年度	1920	1921	1922	1923	1926	1927	1928	1929	1930	1931	1932
全姚	面積	44.4	40.0	30.0	40.0	75.0	75.0	75.0	78.0	70.0	71.4	69.5
	産量	7.4	8.0	2.3	12.6	18.2	26.7	16.8	22.4	19.6	18.0	17.2
蕭山	面積	27.3	27.0	28.0	26.0	25.0	24.9	24.7	28.5	28.5	25.8	25.0
	産量	6.9	8.9	2.8	8.0	1.6	4.2	2.8	6.9	6.3	5.3	9.2
紹興	面積	21.6	20.0	20.0	20.0	16.0	16.0	16.0	11.0	10.6	10.3	3.2
	産量	5.5	5.7	2.0	5.7	2.1	5.4	4.8	2.6	2.7	2.3	21.7
慈谿	面積	9.4	9.0	4.0	4.0	21.0	31.2	21.3	21.4	17.0	16.6	3.8
	産量	1.5	1.8	0.2	1.0	1.5	6.3	3.9	4.1	3.6	3.6	7.9
上虞	面積	4.2	5.0	5.0	5.0	14.0	14.0	14.0	7.2	7.2	7.1	3.0
	産量	0.9	2.0	0.3	1.6	4.2	4.9	3.4	2.5	1.0	1.3	16.7
平湖	面積	14.3	13.2	16.0	14.0	12.3	12.2	12.0	9.9	18.1	19.0	2.4
	産量	1.7	3.2	1.6	2.0	3.0	2.6	1.2	1.0	8.3	4.2	6.0
鎮海	面積	1.2	1.6	3.0	1.0	4.0	4.0	4.0	5.0	6.0	9.0	0.8
	産量	0.1	0.2	0.1	0.2	0.7	1.3	0.9	1.0	1.7	0.2	0.5
海寧	面積	4.3	4.1	3.6	8.0	3.2	3.2	3.1	3.1	2.5	1.7	0.1
	産量	0.6	0.8	0.3	1.8	0.6	0.6	0.3	0.5	0.4	0.2	6.0
杭県	面積					1.8	2.0	2.0	2.5	1.6	12.6	1.1
	産量					0.3	0.3	0.1	2.4	2.2	1.4	0.2
海塩	面積					0.2	0.2	0.3	0.3	0.3		
	産量											0.5
郊県	面積				0.1	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	
	産量					0.1	0.2		0.1	0.1		0.7
定海	面積								1.2	1.7	0.6	
	産量								0.1	0.3		0.8
象山	面積								0.9	0.4	2.4	0.1
	産量											0.9
寧海	面積								2.3	0.4	9.0	0.1
	産量								0.1		0.1	
黄巖	面積								1.2	0.5	0.7	
	産量											
臨海	面積								1.4	1.2	7.5	
	産量										0.1	
南田	面積								0.5	0.1		
	産量											0.4
玉環	面積									0.7	0.6	
	産量											
永嘉	面積									1.3	1.0	
	産量											
瑞安	面積									1.2	0.8	
	産量											
樂清	面積										0.1	
	産量											
温嶺	面積										0.8	
	産量											
合計	面積	127	119	109	118	173	173	173	184	185	198	167
	産量	25	30	9	32	32	52	34	44	47	38	41

出典）実業部国際貿易局編『中国実業誌・浙江省』（第四編第五章、1933年）112～114ページ及び117～118ページより作成。

注）単位は旧畝で、1旧畝＝0.9216市畝。1924年と1925年は不詳。

生産量のいずれでも最も多く、浙江省全体の四割前後を占め続けるようになった。また、一九三〇年代の浙江省で棉花の栽培面積と生産量の多かった県から挙げていくと、余姚県が七〇万畝余りで約二〇万担、蕭山県が約二五万畝で一〇万担弱、慈谿県が約一五万畝で五万担弱、平湖県が一五万担弱で約三万担、



紹興県が一〇万畝で二万担強、杭県が一〇万畝弱で約六万担となっている。これらのことから、一九二〇〜三〇年代に、余姚、鎮海、杭県などの県では、棉花の栽培面積が拡大していったのに対して、逆に、紹興や海寧などの県では減少していったことがわかる（地図を参照）。

さて、主に余姚県などで栽培されていた大葡萄（大葡）種と呼ばれる棉花は、種子が大きく、繊維が極めて粗硬だったのに対して、主に蕭山県などの南沙地方で栽培されていた南翔（南陽）種と呼ばれる棉花は、種子が小さく、大葡萄種に比べて繊維が軟らかく、繰綿歩合も多かったので、一九一〇年代末から徐々に南翔種棉花の栽培が拡大していた。⁽⁸⁷⁾ また、大葡萄種は一〇番手以下の糸でしか紡げなかったのに対して、南翔種は一二番手前後の糸を紡ぐことができた。もっとも、一九一〇年頃までは、余姚県でも南翔種が栽培されていたが、その後、大葡萄種の栽培へ転換していき、品質が悪化したと言われている。⁽⁸⁸⁾ こうして、一九一〇年前後から、かつて市場で名を馳せていた姚花と紹花の地位は失墜し始め、日中戦争時期には、とりわけ、姚花として知られてきた余姚棉は、「纖維粗短色純白ナルモ光沢ナク、紡績用トシテハ十六番手以下ノ混棉用ニ供セラレ、支那棉中ノ最下位ニアリ」との不名誉な評価を受けるようになってしまっ

ていた。⁽⁹⁰⁾

(一) 土布の生産

一九三四年の調査によれば、浙江省の土布の年間生産量は約六〇〇万疋だった。このうち、平湖県では約二〇〇万疋、海寧県と紹興県では各々約八〇万疋、鎮海県と余姚県では各々一〇万疋以上の土布が生産され、また、海寧県硤石鎮では約一〇〇万疋の土布が販売されていた。⁽⁹¹⁾

平湖県では、元来は土布の生産の中心的な地域は、乍浦から新倉鎮に至る沿海地域であり、しかも、棉花の栽培も盛んな地域であり、農民は自家栽培の棉花を糸に紡ぎ、さらに、それを原料にして土布（杜紗布）を織って販売していた。一方、平湖県の中の稲作地で非棉花生産地だった新埭鎮や鐘埭鎮では、自分の着る衣服は棉花を購入し、自紡自織して自給するのが一般的で、織った布を売る者は極めて少なかった。ところが、清末に洋糸（機械製綿糸）が入ってくると、棉花生産の盛んな地区の農民が土糸（手紡綿糸）を用いて織っていた土布は、徐々に洋糸を用いた新土布に駆逐されて、結局は自家用以外の紡織は放棄して棉花の生産・販売を主とするようになった。逆に、元来棉花を購入して自家用に紡織を行なっていた稲作地の農民

は、洋糸を購入して布を織るようになり、最盛期の一九二一年前後には一六〇〜二〇〇万疋の土布が生産された。⁽⁹²⁾一九三〇年代に、平湖県で生産された棉花を原料にして織られた土布（白機布）は、年平均生産量が約四〇万疋で、布商によって買い集められて、金華、衢州、嚴州の各県に販売されていた。⁽⁹³⁾

海寧県硤石鎮では、ほとんど棉花が栽培されていなかったために、従来は土糸を購入して土布を織っていたが、二〇世紀初頭に洋糸が流入すると、土布の原料は土糸から洋糸へ転換していったと言われ、早くから棉花栽培、紡糸、織布の各工程が分離していた。⁽⁹⁴⁾

蕭山県は、古くから棉花栽培が盛んで、この豊富な棉花を用いて生産されていた「蕭山の布は余姚に産するものに比べて二寸ばかり広く、杭州の人によって過江布と呼ばれ」、福建省や江西省にも移出されていたが、やがて紡績工場が設立されると、過江布も洋糸を用いるようになり、土糸の使用は漸減していった。⁽⁹⁵⁾

鎮海県では、慈谿県に隣接する龍湫分区の龍山範市鎮には当時二、三軒の布荘があり、土布を買い集めていたというが、一九世紀末より洋糸が広く出回るようになり、土糸の生産量は漸減し、本機布と呼ばれる土布の生産も減少していった。⁽⁹⁶⁾だが、

この龍溪分区は、比較的古くから土棉が盛んに栽培され、その土棉から紡ぎ出された土糸を原料にして土布が織られて販売されていたことがわかる。

浙江省の中で特に注目したい土布の生産地は、余姚県と慈谿県である。余姚県北部の沿海一四〇余里では、一八世紀頃には皆棉花を栽培しており、これによって生計を立てている者が六〇七割もいたと言われるほど、古くから棉花の栽培が盛んだった。⁽⁹⁹⁾ そもそも、余姚県や慈谿県では、早くも元代には棉花の栽培が開始され、棉花の栽培の拡大とともに土布の生産も盛んとなり、その土布は、余姚小江布として早くから全国に名を馳せ、厚手で丈夫だったため、山地の農民に喜ばれ、主に浙江省内の台州、金華、衢州、温州、処州などや東部沿海の舟山、岱山、象山などの山地農民や漁民を販売対象としていたが、さらに、その一部は江西、安徽、福建、湖南などの省にも販売されていた。⁽¹⁰⁰⁾ とところで、すでに先行研究によって、省東部では、一九世紀末からの洋糸の流入が、棉作、手紡、手織という在来⁽¹⁰¹⁾の土布生産構造を破壊し、農民を「資本のための隷農」というべき原棉生産者と洋糸を用いて手織する新土布生産者に分断せしめるという形で、在来綿業が再編成されたが、寧波では新土布はそれほど興隆しなかったと説明されている。⁽¹⁰²⁾ 余姚県や慈谿県

でも、新土布はほとんど生産されることなく、在来綿業が大きく再編されることはなかったと言える。さらに、その後の洋布（機械製綿布）の流入により、余姚の土布も打撃を受けたものの、第一次世界大戦時期に外国綿布の流入が滞ったこともあって、大戦後の一九二二―二三年には、余姚の土布業は繁栄期を迎え、年間七〇―八〇万足の土布が売れていた。だが、一九二三年以降はその販売量も減少していき、一九三四年には余姚の土布商業の中心地となっていた澣山鎮で大手の榮昌布庄が閉店し、余姚県と慈谿県にあった布庄の全取布量は、一九二三年の約三割にまで落ち込んだ。ただ、衰退したとは言え、余姚県及び慈谿県の土布は、一九四九年頃までは一定の販売市場を維持し、完全に淘汰されることはなく、しかも、その土布には長らく縦糸・横糸ともに土糸が用いられ、洋糸を用いるようになったのは極めて遅く、その比率も非常に小さかった。⁽¹⁰³⁾

以上から、改良棉の栽培を容受するか否かは、主要には在来綿業の再生産構造に大きく規定されていたことがわかる。すなわち、従来から土棉を栽培し、それを原料にして土糸さらには土布を生産する農民は、改良棉の栽培を容易には受け入れなかった。

五、おわりに

一九三〇年代の浙江省では、改良棉の栽培の受け入れが必ずしも全面的に進展せず、一部の地域では棉花改良事業に反対する暴動まで発生してしまった。これについては、様々な原因が考えられるが、本稿では、改良棉の栽培を受け入れるか否かの差異を生む主要な原因が、在来綿業の再生産構造の差異にあったことを論じた。

また、以上のように、改良棉の栽培の受け入れについて困難な状況があり、しかも、浙江省政府が事実上独力で棉花改良事業を実施したにもかかわらず、一定の成果を上げたことは評価できる。確かに、一九三六年に至っても浙江省の改良棉の生産が全国に占める割合は、栽培面積では約〇・三％、生産量では約〇・七％であり、特に、米棉のみについて見ると、栽培面積では〇・二％弱、生産量では〇・四％弱にしかすぎなかった⁽¹⁰⁾。

だが、一九三〇年代に、浙江省内にあった三友、和豊、通惠公の三つの紡績工場の改良棉皮棉に対する年間需要量は、約一〇万担であったとも、あるいは約一四万担であったとも言われる⁽¹⁰⁾が、一九三六年には浙江省で生産された改良棉八万担余りだけで、同省内にある紡績工場の需要量の半分以上を供給すること

ができた。また、高番手細糸の生産を中心としていたために改良棉を必要としていた三友実業社杭廠の年間原棉需要量は二・五万担であったから、数字上は、一九三五年に浙江省で生産された改良棉約三・八万担のみでその需要量を充たしてなお余りある状態となったわけである。このように見てくると、浙江省内にあった紡績工場にとっては、一九三〇年代の浙江省の棉花改良事業は、浙江省内の紡績工場の需要を充たすという当面の目標からすれば、一定の成果を上げたとも評価できる。

もし、当時の省政府側に非難されるべき過ちがあったとすれば、それは、当時の省政府側の技術者官僚たちが近代的合理性をあまりにも信奉しすぎて性急に過ぎたことであらうか。だが、その性急さこそは、一九三〇年代の中国が置かれた危機的状況、すなわち、世界恐慌の影響を受けて発生した経済的危機と、そして、何よりも日本の「満州」侵略以来の動向に対する中国側の危機意識の高まりの中で不可避的に生み出されていたものだった。

在来綿業の再生産構造は経済政策の成果を大きく規定するものではあったが、実は、その在来綿業の再生産構造は決して固定的なものではなく、常に変容する可能性を有しており、そもそも、経済政策もその変容の要因の一つとなった。本稿は、こ

のことを示す一例を一九三〇年代の浙江省で実施された棉花改良事業に見出すことができたのである。

注

(1) 拙稿「中国の農業近代化に対する抵抗——一九二〇、三〇年代浙江省の蚕種改良事業に見る——」(『社会経済史学』第五九卷第二号、一九九三年七月)。

(2) 飯塚靖「南京政府期・浙江省における棉作改良事業」(『日本植民地研究』第五号、一九九三年七月)。同稿では、農民の反対運動の根本的要因を「普及種子である百万棉・米棉そのものが対象地域の気候風土に適せず在来種と比べて優位性を發揮でき」なかったにもかかわらず、省政府側が強引に改良棉栽培を普及させようとしたことに求め、「浙江省の棉作改良事業は、農業科学技術の応用や行政組織を動員した普及活動など当時の中国としてはきわめて先進的な事例であったが、内包した様々な問題点のゆえに十分な成果に結び付かず、抗日戦争を迎えた」と結論している。

(3) 実業部国際貿易局編『中国実業誌・浙江省』(一九三三年)第四編第五章、一一二ページ。

(4) 中支建設資料整備委員会(上海・興亜院華中連絡部内)編『全国経済委員会工作報告』(編訳彙報第一編、一九三九年)二三ページ。

(5) 中支建設資料整備委員会(上海・興亜院華中連絡部内)編『全国経済委員会棉業統制委員会三年来工作報告』(編訳彙報第六編、一九四〇年)四ページ。

(6) 華北棉産科学研究所編『国民政府ノ農業政策』(一九三七年)九七ページ。

(7) 「支那棉花ニ関スル調査(湖北省、河南省)」(臨時産業調査局『支那棉花ニ関スル調査(其ノ二)』一九一九年)五ページ。

(8) 譚熙鴻「改進中国棉業之急要——在棉産會議席上演講——」(『浙江省建設月刊』第六卷第七期、一九三三年一月)七〜八ページ。

(9) 邵亮熙「浙江棉業推広之途徑」(『浙江省建設月刊』第一〇卷第六期、一九三六年十二月)六ページ。

(10) 蕭輔「十年来之浙江棉業改良与推広」(『浙江省建設月刊』第一〇卷第一期・十週記念專号、一九三七年五月)七九・九〇ページ。

(11) 鳴春「浙江棉業推広事業概況」(『浙江農業推広』第二卷第三・四期、一九三七年一月)六ページ。

(12) 「本省棉業推広与農村問題——汪秘書兼棉業処主任英賓在本庁ノ紀念週報告——」(『建設周刊』第一九三期、一九三五年十二月五日)。

(13) 前掲書、『中国実業誌・浙江省』第七編第二章、一九三ページ。

(14) 前掲、邵亮熙「浙江棉業推広之途徑」三〜四ページ。

- (15) 曾養甫「振興中国棉業之根本問題——在棉産會議席上演講——」(『浙江省建設月刊』第六卷第七期、一九三三年一月) 六ページ。
- (16) 周惕「日本侵略我國棉紗業之過去與現在」(『浙江省建設月刊』第七卷第八期、一九三四年二月) 一一ページ。
- (17) 前掲、邵亮熙「浙江棉業推廣之途徑」五ページ。
- (18) 前掲書、『中国実業誌・浙江省』第七編第二章、二一ページ。
- (19) 同右書、『中国実業誌・浙江省』第七編第二章、一九ページ。
- (20) 陸志謙・陳立儀「三友実業社与陳万運、沈九成」(『浙江文資料選輯』第三九輯、一九八九年三月) 二〇一〜二〇六ページ。
- (21) 「日人暴動案／市府昨堤抗議」『申報』一九三二年一月二三日。
- (22) 「日人昨日迭次暴動」『申報』一九三二年一月二日。
- (23) 「三友社助送內衣褲」『申報』一九三二年三月二日。
- (24) 前掲、「三友実業社与陳万運、沈九成」二〇七〜二〇八ページ。
- (25) 嚴強「杭州第一棉紡織廠」(『杭州文史資料』第一四輯、一九九〇年二月) 二六八〜二六九ページ。
- (26) 「本厅聘請專家組織棉業改進会研究改進及推廣法」(『建設週刊』第六〇期、一九三三年五月一八日)。なお、穆藕初は、一九三一年一月より、実業部常務次長を務めていた。
- (徐友春主編『民国人物大辞典』河北省人民出版社、一九九一年、一五二二ページ)。
- (27) 「一閩月之農畝」(『浙江省建設月刊』第六卷第七期、一九三三年一月) 三九ページ。
- (28) 省棉場「一年来棉業之推廣」(『浙江省建設月刊』第八卷第一期、一九三四年七月) 三九〜四三ページ。
- (29) 前掲、邵亮熙「浙江棉業推廣之途徑」三ページ。
- (30) 「共三千元／棉産展覽会經費」(『建設週刊』第一九六期、一九三五年二月二六日)。
- (31) 前掲、邵亮熙「浙江棉業推廣之途徑」四ページ。
- (32) 馮驥傳「八年来浙棉之改良与推廣」(『浙江省建設月刊』第九卷第三期、一九三五年九月) 六〇〜六二ページ。
- (33) 省棉場「一年来棉業之推廣」(『浙江省建設月刊』第八卷第一期、一九三四年七月) 三九〜四三ページ。
- (34) 「杭県棉業改良実施区二十三年工作報告」(『浙江省建設月刊』第九卷第四期、一九三五年一〇月) 八〜九ページ。
- (35) 「余姚棉業改良実施区半年来之工作」(『浙江省建設月刊』第八卷第六期、一九三四年二月) 一一〜一三ページ。
- (36) 「杭県棉業改良実施区二十四年工作概況」(『浙江省建設月刊』第一〇卷第三期、一九三六年九月) 一〜三ページ。
- (37) 「蕭山棉業改良実施区二十四年工作概況」(『浙江省建設月刊』第一〇卷第三期、一九三六年九月) 四〜八ページ。

- (38) 「余姚棉業改良實施區二十四年工作概況」(『浙江省建設月刊』第二〇卷第三期、一九三六年九月) 一七〇—一七一頁。
- (39) 前掲書、『浙江省農業改進史略』一四〇—一五一頁。
- (40) 「浙江省棉業推廣最近之概況(統)——棉業管理處馮副主任羅傳在/紀念週報告——」(『建設周刊』第一六九期、一九三五年六月二〇日)。
- (41) 注(19)に同じ。
- (42) 邵亮熙「浙江棉業推廣之檢討」(『浙江省建設月刊』第九卷第一二期、一九三六年六月) 一三—一四頁。
- (43) 注(14)に同じ。
- (44) 前掲、邵亮熙「浙江棉業推廣之途徑」四〇—四二頁。
- (45) 前掲、蕭輔「十年來之浙江棉業改良與推廣」八六—八七頁。
- (46) 「農總場進行/改進百萬棉拉力/購辦測驗機以利辨別又建築稻麥場農具室」(『建設周刊』第一三一期、一九三三年九月二七日)。
- (47) 潘萬里「浙江沙田之研究」(蕭鍾主編『民國二十年代中國大陸土地問題資料』六九、成文出版社有限公司・(美國)中文資料中心、一九七七年) 三六三—三六五頁。
- (48) 姚方仁・方梓農「一年來之浙江經濟」(『國際貿易導報』第九卷第二號、一九三七年二月一五日) 七四—七五頁。
- (49) 浙江省慈谿市農林局編『慈谿農業志』(上海科學技術出版社、一九九一年) 一三九—一四〇頁。
- (50) 前掲、蕭輔「十年來之浙江棉業改良與推廣」八五—八六頁。
- (51) 中華棉業統計會編『民國二十五年中國棉產統計/附二十六年中國棉產統計』一九三七年(一九三九年華北棉產改進會調查科翻印) 九六—九七頁。
- (52) 前掲、「鎮海縣棉業改良實施區二十四年工作概況」九〇—九二頁。
- (53) 王郁岐「浙江省二十四年/棉產調查之估計」(『浙江省建設月刊』第九卷第一二期、一九三六年六月) 一五—一六頁。
- (54) 前掲、「鎮海縣棉業改良實施區二十四年工作概況」一〇〇—一〇二頁。
- (55) 同右、一一—一三頁。
- (56) 前掲、「杭縣棉業改良實施區二十三年工作報告」八〇—八二頁。
- (57) 前掲、「杭縣棉業改良實施區二十三年工作概況」一六—一七頁。
- (58) 前掲、「杭縣棉業改良實施區二十四年工作概況」一〇—一二頁。
- (59) 前掲、「蕭山縣棉業改良實施區二十四年工作概況」五〇—五二頁。
- (60) 「政策已定悉力以赴/推廣百萬棉改良棉業」(『建設周刊』第一六二期、一九三五年五月二日)。
- (61) 「鎮海縣棉業改良實施區二十四年工作概況」(『浙江省

- 建設月刊』第一〇卷第三期、一九三六年九月）一〇ページ。
- (62) 前掲、「余姚県棉業改良実施区二十四年工作概況」一七ページ。
- (63) 「棉農反対改良棉」『申報』一九三五年四月二〇日。
- (64) 「浙建設庁／推広三北棉業」『申報』一九三五年四月二七日。なお、余姚、慈谿、鎮海三県の北部は三北と呼ばれていた（張理文「浙江中棉品種之研究」『邵江省建設月刊』第八卷第一〇期、一九三五年四月、五六ページ）。また、虞洽卿は、浙江省鎮海県の出身で、一九一三年に三北に投資し、防波堤と埠頭を築き、三北輪船公司を設立した（前掲書、『民国人物大辞典』一八八六ページ）。
- (65) 「慈谿県棉業改良実施区二十四年工作概況」（『浙江省建設月刊』第二〇卷第三期、一九三六年九月）一四ページ。
- (66) 「浙東改良棉之收穫運銷及展望——棉業改良場馮場長肇傳／在記念週報告——」（『建設週刊』第一八八期、一九三五年一〇月三十一日）。なお、前掲、「鎮海県棉業改良実施区二十四年工作概況」（一ページ）には、解恒泰花号以外に米棉の収買を許可されたのは、同昌花行ではなく、同大花行であると記されている。
- (67) 前掲、「鎮海県棉業改良実施区二十四年工作概況」一ページ。
- (68) 前掲、「浙東改良棉之收穫運銷及展望——棉業改良場馮場長肇傳／在記念週報告——」。
- (69) 前掲、「慈谿県棉業改良実施区二十四年工作概況」一六ページ。
- 六ページ。
- (70) 注(68)に同じ。
- (71) 前掲、「余姚県棉業改良実施区二十四年工作概況」一八ページ。
- (72) 注(68)に同じ。
- (73) 「本庁頒発布告／嚴禁私運百万棉／在各県棉花出口各地方分設查驗機關派員検査」（『建設週刊』第一八八期、一九三五年一〇月三十一日）。
- (74) 「各県棉業改良実施区工作近況」（『建設週刊』第二八三期、一九三五年九月二十六日）。
- (75) 前掲、『浙江省經濟便覧』二四九ページ
- (76) 前掲、「浙江省棉業推広最近之概況（統）——棉業管理処馮副主任肇傳在／記念週報告——」。
- (77) 前掲、「本省棉業推広与農村問題——汪秘書兼棉業処主任英賓在本庁記念週報告——」。
- (78) 注(68)に同じ。
- (79) 前掲、「杭県棉業改良実施区二十四年工作概況」三ページ。前掲、「蕭山県棉業改良実施区二十四年工作概況」八ページ。前掲、「鎮海県棉業改良実施区二十四年工作概況」一二ページ。
- (80) 前掲、「杭県棉業改良実施区二十四年工作概況」一ページ。
- (81) 前掲、「慈谿県棉業改良実施区二十四年工作概況」一六ページ。

(82) 前掲、『鎮海県棉業改良実施区二十四年工作概況』一ページ。

(83) 前掲書、『中国実業誌・浙江省』第四編第五章、一〇八—一〇九ページ。

(84) 「支那ノ棉花ニ関スル調査（江蘇省、浙江省、安徽省）」（臨時産業調査局『支那棉花ニ関スル調査（其ノ一）』一九一八年）一一二ページ。

(85) 「江蘇、浙江地方産繭視察報告」（『通商彙纂』明治四十五年第一五号、一九二二年七月一日）六二二ページ。

(86) 「浙江省棉花概況」（『通商彙纂』明治四十一年第二八号、一九〇八年五月二三日）一二二ページ。

(87) 前掲、「支那ノ棉花ニ関スル調査（江蘇省、浙江省、安徽省）」一一二ページ。

(88) 前掲書、『中国実業誌・浙江省』第四編第五章、一一〇ページ。同書では、余姚県で南翔種から大葡萄種への転換が起こったのは、大葡萄種が南翔種に比べて吸水力が強く、綿に水気を含ませて重量を増して利益を上げようとしたためだとしているが、これでは、蕭山県では南翔種が栽培され続けたことを説明できない。

(89) 同右書、一〇九ページ。

(90) 興亜院華中連絡部編『支那重要国防資源棉花、麻、調査報告』一九四〇年、一〇六ページ。

(91) 敵中平『中国棉紡織史稿』一二八九—一九三七——從棉紡織工業史看中国資本主義の發生と發展過程——（科

学出版社、一九五五年）二六二ページ。なお、資料の出版は、全国経済委員会棉業統制委員会編『華東区四省棉紡織品産銷調査』（未発表）となっている。

(92) 徐新吾主編『江南土布史』（上海社会科学院出版社、一九九二年）六六七—六八九ページ。

(93) 段蔭壽『平湖農村經濟之研究』（蕭鐸主編、民国二十年代中国大陆土地問題資料四五、一九七七年）二二七五—二二七五二ページ。

(94) 前掲書、『江南土布史』六九三ページ。

(95) 『蕭山県志稿』民国二十四年、卷一、城門、物産、土布。

(96) 同右書、『蕭山県志稿』卷一、城門、物産、土棉紗。

(97) 前掲書、『江南土布史』六七四ページ。

(98) 『鎮海県志』民国二十二年、卷四二、物産、紫花布。

(99) 『余姚県志』光緒二十五年、卷六、物産、花之品、棉花。

(100) 前掲書、『江南土布史』六六四ページ。

(101) 秦惟人「清末鄉村綿業の展開——浙東を中心にして——」（野沢豊・田中正俊編『講座中国近現代史』第二巻、東京大学出版会、一九七八年）七三—七五ページ。

(102) 前掲書、『江南土布史』六六四—六七四ページ。なお、余姚県では日中戦争中も年間約二六万匹もの土布が生産されていた（浙江省連絡部『浙江省經濟便覧』一九四四年、二五一ページ）。

(103) 表1、表2、及び前掲書『民国二十五年中国棉産統計／附二十六年中国棉産統計』。

- (104) 前掲、邵亮熙「浙江棉業推广之途径」四ページ。
- (105) 前掲書、『中国実業誌・浙江省』第四編第五章、一二六ページ。
- (106) 同右書、『中国実業誌・浙江省』第七編第二章、一九ページ。

Saiichi BEN'NO, *The cotton improvement campaign in Zhejiang during the 1930s*

In the 1930s the Zhejiang government promoted the introduction of improved cotton breeds. The annual output of improved cotton formed only about 0.3 per cent of the total cotton output in China, but this was sufficient to meet the demand from cotton mills in Zhejiang. In that sense, therefore, the cotton improvement campaign was effective. But some peasants resisted the cotton improvement campaign and this resulted in riots.

This paper examines the possibility that the reproduction-structure of the conventional cotton industry was the main cause behind resistance to improved cotton breeds. That is, the peasants who resisted improved cotton breeds were those who were growing conventional native cotton to spun into yarn which they wove into cloth.

The improved cotton was more suited for machine-spinning in cotton mills than conventional native cotton. On the other hand, conventional cotton was better for peasants working at home by traditional methods to spin their own yarn. In other words, it was not the peasants who profited from the cotton improvement campaign but the capitalists of the cotton industry.